

今日は雨模様でテニスもなく、その他の作業も思いつかないので、スポーツの歴史を整理してみようと考えました。現役時代にゴルフコンペなどで頂いた取り切りのカップに多くの優勝者のリボンなどがついていました。自分の没後、これらカップは処分されるのですが、優勝者の名前などは何らかの形で保存しておきたいと考えました。現在はテニス中心の生活ですが、若いときは野球少年だったことも記録に残したいと思いました。

1. 小学生時代

今(2016年5月27日:72歳)小学生時代のことで思い出されることはほんのわずかしかありません。学校から帰るとすぐに近くの田んぼに出かけて、そこで三角ベースの野球を楽しみました。皆と遊ぶ時間がないときや遊ぶ友達がいないときは、自宅の床下の石垣にボールをぶつけて遊んでいました。その時グローブはまだなく、素手で遊んでいたように思います。兄が二人いますが、兄たちの時代は遊ぶどころか家の手伝い(農業)ばかりしていたようです。

また、小学生のころは、良く体のあちらこちらにできものが出来て、足の付け根や喉などにある扁桃腺が腫れて、切った跡が何か所もあります。また、中耳炎で地域の医者に通った記憶もあります。これらの不具合と運動会が重なって、運動会を休んだ記憶もあります。中耳炎は今も続いており、私の左耳の鼓膜はありません。鼓膜がないと中耳炎は全く痛みを感じないので、そのままです。家族で海水浴に行った記憶がありますが、私は水嫌いでした。足が地面についていないと嫌でした。そんな具合で小学生時代の運動は野球しか思い出しません。

2. 中学時代

中学校に入ると、当然のことのよう、野球部に入りました。それ程上手ではありませんでしたが、2年生では補欠の選手、3年になって5番レフトを守りました。今思うと結構打っていたのですが、当時は達成感などというものはなく、淡々と試合で打っていたように思います。対外試合でも市内新人戦で優勝し、東部大会に出た記憶があります。この時は富士宮から沼津まで自転車に乗って行ったように思います。貧しい時代、貧しいとも感じないで、淡々と過ごしていたようです。これも後から感じたことですが、結構女子生徒などにモテたようです。当時私には全くその感じはありませんでした。図 2-1 は新人戦に優勝した時に撮った写真です。後列左から3番目が私です。

私の中学校(富士宮四中)には陸上部がなかったので、中体連の大会などには体育の先生が目をつけた生徒を集めて参加していました。私も陸上 800m に参加したことがあります。大会の規模は良く覚えていませんが、予選を通過して決勝に進み、6位か7位(全8人?) だったと思います。私の人生で、陸上競技の試合に出たのはこの時だけです。

中学 3 年の時の担任(矢邊先生)が体育の先生で、野球部監督だったので、体育の授業では、体力測定、走力、持久力、球技、ダンスなど、すべてが楽しいものでした。



図 2-1 富士宮四中野球部ナイン(新人戦優勝)

いずれの競技もトップではないけれど、上位につけていました。走力は短距離よりも中長距離の方が実力は上位でした。でも、必ず勝てない人が、上に何人か居ました。バスケットボールやバレーボールなどの競技は、野球部が専門部に挑戦する形で何度も遊びました。この時の野球部は運動神経の優れたものが集まっていたので、専門部に何回か勝利した記憶があります。

3. 高校時代

高校は沼津工業高校に行きました。当時、大学進学のための普通高校に行く人は今程多くなく、成績優秀の者でも、就職のため、工業高校に行く人が多くありました。私のエリアでは富士市にある富士高校が進学校として、第一位でした(当時は偏差値などというものは未だなかったように思います)。当初私は市内の富士宮北高に行くものと思っていたので、それほど進学のための勉強もしていませんでした。北高から野球部の練習に参加しないかと誘われて、仲間 3 人で参加したこともあります。これは野球部への勧誘と思いますが、その当時は特に考えもなく、言われるままに参加したように思います。ところが、私の長兄が兄弟(男 3 人女 3 人)の内一人(長兄は農家の跡取りのため農業、次兄は商業)は工業高校に行かせたらどうかという意見を父にしたために、進学懇談会で、沼津工業高校志望になってしまいました。当時の担任は私の共通試験(確かそのようなものがあつた記憶があります)の結果を見て、沼津工業の機械科(当時機械科は就職に有利とみられており倍率が高かった)は相当頑張らないと無理だ、富士高なら入れるだろうとのコメントでした。以後、私は、後輩の野球指導も、そこそこ、にして進学勉強を始めた記憶があります。

そのような事情で中学野球部の仲間 3 人(小野田、吉野と小生)は沼津工業高校に入学し、

同時に野球部に入りました。

高校では、毎日朝 6 時に家を自転車で出発、身延線西富士宮駅から富士駅-東海道線-沼津駅、沼津駅から高校までバスまたは徒歩で行くというルートでした。多分 2 時間から 3 時間(待ち時間などを入れると)要したと思います。

放課後、野球部の練習が終わるのが、19 時前後でした。記憶によると、薄暗くなってボールが見えなくなるまで練習は続けました。当時は未だ照明設備等全くありませんでした。家に帰着するのは大抵 10 時を過ぎていました。食事を済ませると、各自 1 個ずつボールを縫わなければなりません。一年生は全員ノルマとして、練習で糸が切れたボールの修理を課せられました。ボールを縫い終わると、明日のために、直ちに床に就かなければなりません。当時は土曜日でも学校があり、日曜日でも練習がありました。家で勉強する時間は一週間でも 0 でした。

この日程で学校生活を続けるわけにはいかずに、確か 6 月頃と思いますが、退部を申し出ました。自分自身も、耐えられないと思っていたところ、友人の小野田君も止めると言ってきたので、二人で退部しました。部室で当時 3 年生のキャプテンから頭をゴツンと殴られて、私たちの高校野球はおわりました。高校には寮もありましたし、2 番目の姉が嫁いで富士駅の近くに住んでいたのも、ここに下宿しないかななどの話もありましたが、当時はこれらを真剣に考えることはありませんでした。良く考えれば、このような状況になることは分かったと思いますが、当時は中学校の野球部の延長ぐらいに安易に考えていたようです。

同じ中学野球部(投手)だった吉野君は頑張っ、3 年生の夏の県大会では、投手として準決勝まで行きました。私は野球部を辞めてから、出版委員会に所属し校内新聞や卒業雑誌などの作成のため、もっぱら応援するのみでした。小野田君も出版委員会に入りましたが、3 年生になって、委員長(部長)の選挙で小生に負けてから、エスペラント部を立ち上げ活動しました。小野田君は中学時代、野球部キャプテン 4 番バッター、生徒会長等として活躍してただけに、私が部長のサークルで活動するのは耐えられなかったのではないかと思います。

野球以外のスポーツの記憶は体育の授業の他には、香貫山全校マラソン、科対抗大運動会、科対抗ボート大会などの記憶が残ります。中学時代と同様に、いずれの行事でも、トップになることはなく、そこそこ、上位の方に位置していたと思います。全校マラソンは 1000 人中確か 80 位から 90 位ぐらいだったと思います。大運動会でも 1500m の競技で選手に選ばれましたが、結果は 3~4 位だったと思います。沼津市内の狩野川で行われたボート大会ではコックスを任された記憶がありますが、勝敗の記憶がないので、おそらく、出ただけという結果だと思っています。

ボート大会のころ(3 年生の夏)既に就職は決まっていたと思います。就職先は日立中央研究所です。何故日立中研かというと、父が就職懇談会に出たときに、日立中研は良いところらしいが、沼津工業高校からはまだ誰も行っていないという情報をもらってきたからです。3 年

生の1学期と思いますが、ある日突然、先生から、「会社から採用担当者が面接にきているので出るように」と言われて、学校で面接を受けました。当時は高度経済成長期で企業が良い新人を採用するのが難しかったため、企業側が学校を回って人材確保することが行われていました。面接内容で覚えているのは、クラスで成績が5位以内に入っているか。私は確か2位(当時の通知表(成績表)には順位が書いてあった)だったので、もちろんと答えました。次にどんな本を読んでいるかという質問には、蛍雪時代(当時の大学受験者向け雑誌)と事実を伝えたところ、進学しようと思っていたのかと言ってきたので、そうですと答えました。実は大学進学は考えていませんでしたが、興味があってこの本を購読していました。以上の簡単な面接から、一週間もしないで内定の連絡を受けました。内定後会社から定期的にレポートの提出を求められました。当時はこれの内容によって本採用が決まるものと考え、良い印象のレポートを送りました。このレポートに必ず細かな回答が付けられて戻ってきました。回答の署名は只野文哉となっていました。入社後に判ったことですが、只野さんは日本で初めて電子顕微鏡を開発した工学博士で、後に日立中研の副所長、退社後は只野財団の代表として国レベルの技術教育の場で活躍しました。



図 3-1 ボート大会 狩野川(S36(1961)-7)

4. 日立中研時代

中研に入社した後、当然のことのように、野球部(軟式)に入りました。野球部に入って直ちに、監督から「廣瀬はピッチャーをやらないか」といわれ、何の問題もなくピッチャーになりました。投手経験はこれまでにありません。中学時代はバッティングピッチャーをお互いに務めますが、この任務は好きだった覚えがあります。実際国分寺市や北多摩大会などで投手をやったところ面白いように三振が取れました。誰に教わったわけでもありませんが、今でいうところの、スライダーでしょうか、これでうまく三振が取れました。私はクォーターローだったので、右打者の肩の上から大きな落差で落ちながら曲がるものでした。うまく入ると、ほとんどのバッター(草野球の)は空を切りました。これにより、

国分寺市の大会では、大体優勝、北多摩大会に行っても、2,3回戦まで進んだ記憶がありません。しかしながら私は投手として体を作ったこともなく、正しい訓練も受けていないので、制球力や投球術は未熟なものでした。このために、四球を多く出して野手の信頼を失ったことも多々ありました。1963(S38)年に年間10勝、打率2割8分をマークしたのが最も良い成績でした。



図 4-1 日立中研野球部 国分寺大会優勝(1963年)
後列左から3番目が私です。



図 4-2 中研時代(投手)

この好成績のため、職場ではニックネーム「エース」と呼ばれた時期もありました。

このように、野球に打ち込んでいるとき、入社もないのに、茨城県勝田市にある日立製作所那珂工場(現日立ハイテク)内に設けられた中研分室に転属しました。そこで、私の研究室のテーマである質量分析計の開発をやるためでした。

図 4-2 は転勤により中研野球部を辞める時に、部員から送っていただいたサインボールを示します。ボール全周にわたりサインがあるので4点から写真を収めました。

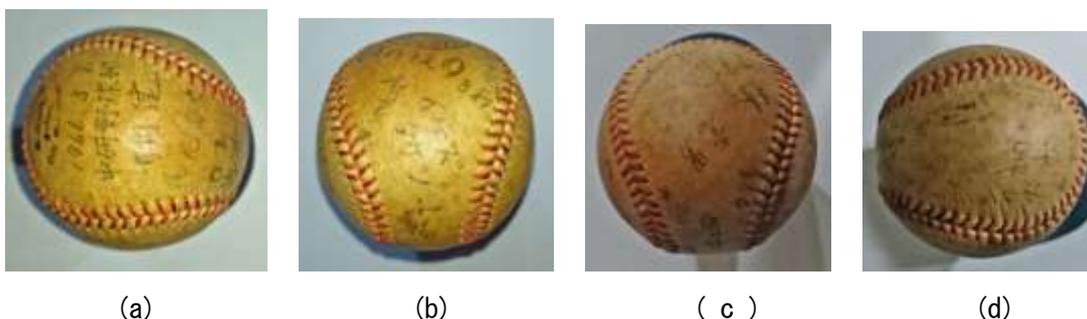


図 4-2 中研野球部 退部時に頂いたサインボール

図 4-2 は大事に保管してあったボールですが、長い間(50年)の劣化のため良く読めない部分があるので、書いてある内容を下記に示します。

1966, 3, 1 中研野球部 竹内健 尾花富夫 原口 藤生 小野 イケズタケシ いのうえゆ

きお 中村貫太郎 T. Umezawa ワタナベシゲル 林光男 飯本 安藤圭 マツモトヨシカズ
福島 セキタ 小川和 鈴木(?) 森井(?) その他写真(d)の上部で達筆の文字が読めません。

野球以外に記憶に残っているスポーツは当時会社で力を入れていた、レクリエーションです。中でも記憶に残っているのが、部対抗運動会です。たまたま私は日立創立 60 周年記念運動会で応援団長を命じられて、これをこなしました。高校時代の応援をパクって、応援歌を作ったり、それなりの活躍をしました。応援団のコンペでも上位だったと思います。また、応援団長も参加義務のあった最終のリレーでも頑張った記憶があります。



図 4-2 日立中研 日立創立 60 周年記念運動会 小金井グランド
後列左から 5 番目が私(応援団長)

那珂工場でも野球部に入りました。そこには中研よりも、高校野球で活躍した方が多く、西鉄の豊田と高校時代に一緒にプレーしたという監督がいて、ほとんどワンマン運営でした。合宿練習なども組み込まれていて、かなり本格的なものでした。ここでは春先に準硬式の試合があり、その後軟式の試合がありました。このため、練習もこれに沿って行いました。当時公式試合は平日に行われる場合があり、会社の許可を得て、平日の試合に参加したこともありました。私は中研でピッチャーをやっていたので、ここでもピッチャーをやりました。しかしながら、準硬式の球に順応できずに、肩を壊してしまいます。このため、那珂工場での試合は何回か登板した記憶はありますが、勝利投手になった記憶はありません。野球で肩を壊した後、退部してテニスの道に入りました。

5 日立製作所 茨城工業専門学校(日工専:茨専)

中研に入ってから、いろいろ紆余曲折はありましたが、茨専で 15 か月、茨専研究科(東北大学受託研究員)として 12 か月勉強の機会をもらいました。この間茨専時代も野球、テニス(ソフト)の二つの運動クラブに入りました。野球部の試合は日立市の市長杯、日立工場課対抗、茨専-京専対抗戦等でした。



図 5-1 茨専-京専 対抗戦(横浜市) 前列右から 2 人目



図 5-2 茨専時代

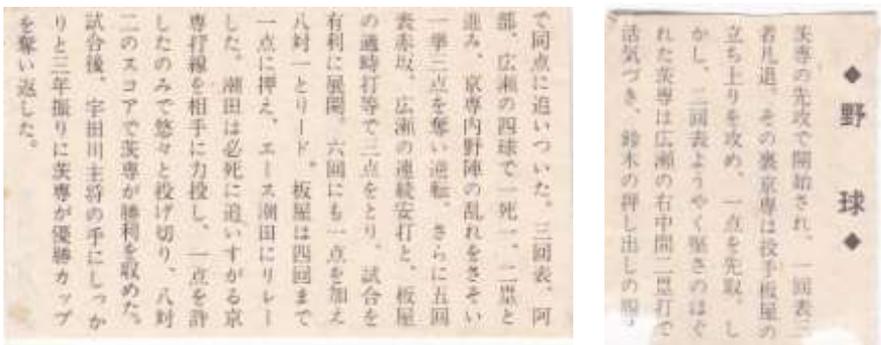


図 5-3 当時の学校新聞の記事(茨専-京専対抗戦)

ここでは、投手もやりましたが、主は外野手で打順は 4 番バッターでした。茨専では高校野球などで活躍経験のある者は少なく、比較的素人集団でした。私は会社の野球部で肩を痛めた後だったので、投手は補助的にやりました。ハードスケジュールの勉強の合間のクラブであり、素人の多いクラブだったため、試合の結果は良くありませんでした。但し、同じ日工専である京専との試合は完勝でした。全寮対抗戦でも 2 回戦まで進みました。



図 5-4 日立工場全寮対抗野球大会(会瀬グラウンド)

茨専時代は、野球からテニスに変更しようと考えていた時期だったので、ソフトテニス部にも入りました。こちらは、素人でしたが、部員数が足りなくて、対外試合のメンバーで試合もしました。個人的にあまり活躍した記憶はありませんが、全寮対抗戦とか茨専-京専対抗戦では勝っていました。テニスはその程度でした。



図 5-5 茨専-京専対抗戦(ソフトテニス)
後列左から 3 人目が私



図 5-6 日立工場全寮対抗戦
優勝しました

茨専で勉強とスポーツに励んだ結果、茨専研究生としてさらに 1 年東北大学に受託研究員という資格で派遣されました。この間は特に定まったスポーツ活動は行いませんでした。大学構内は当時の学園紛争で荒れていました。そんな中で、助手や技官などの若手のグループの野球(軟式)チームから誘いも受けましたが、受けませんでした。大学の研究室対抗バレーボール大会などには誘われるまま参加しました。また、仙山線の宮城-山形県堺に面白山スキー場があったので、シーズン中は良く通いました。スキーをやるのは初めてでしたが、スキー場のスクールに入って、終了時にはバッジテスト(初級)にも合格しました。



図 5-7 面白山スキー場にて

6 日立製作所 那珂工場

6.1 テニス

私のスポーツは、野球で肩を壊してから、テニス中心になりました。工場には硬式テニス部しかなかったのが、初めて硬式テニスの道にはいりました。当時民間会社では福利厚生部門に力を入れており、社員のレクリエーションを充実させて、業績向上に繋げるという流

れがありました。これらの一環として運動部の活動も、会社組織の一環として設備、道具、ウェアまでも補助金(予算)が割り当てられていました。

当初は茨城県全体としても未だ硬式テニスの開始(導入)から時期が浅く、日立製作所、日本原子力研究所、茨城大学のクラブがテニス協会をリードしていました。このような状況下の元でテニスを始めましたが、技術的には大会で勝てるまでに時間がかかりました。一方運営面ではテニス部の職場窓口から庶務幹事、幹事長、部長と務めさせていただきました。このような状況から、定年退職後に、那珂テニス部の歴史、戦績などを「(私編) 那珂テニス部の半世紀」に纏めました。したがって、ここでの記述(テニス歴)は省略し、その表紙と発刊の挨拶を表示するのみとします。図 6.1-1 は「(私編) 那珂テニス部の半世紀」の表紙、図 6.1-2 は同背表紙を示します。図 6.1-3 は「(私編) 那珂テニス部の半世紀」の発刊の挨拶(コピー)を示します。

上記製本の中にテニス活動のすべてが記述してあります。「(私編) 那珂テニス部の半世紀」は 3 冊製本し、1 冊は那珂テニス部に残り 2 冊は自分で保管してあります。もしも、この本を見たい方がおられましたら、いつでも御貸しすることが出来ます。

この本の発刊以後から現在までもテニスは生活の中心になっています。日本シニアテニス連盟-茨城県シニアテニス連盟の組織を中心として那珂工場テニス部 OB 会等も含めて、4 つのグループで 5 回/週の割合でテニスを楽しんでいます。このように今日健康で生活できているのはテニスのおかげであると感謝しております。退職後の活動については 7 章に示します。

(私編)那珂テニス部の半世紀

DVD VIDEO 5枚付録



那珂コート(Google Map より切り取り)
使用:1986-2010

左より
1977 事業所対抗 優勝
アンツーカーコート(1962-1985)
1977 軽井沢 森下牧荘

発行 2010年 7月 7日 編集・製本 廣瀬 博

図 6.1-1 (私編)那珂テニス部の半世紀 表紙



図 6.1-2 背表紙

発刊の挨拶



2009年10月1日

私が那珂テニス部の歴史を纏めようと思ったのには3つの理由があります。第一は会社をリタイアして暇になったこと。第二は、私は那珂テニス部では選手としては十分な活躍が出来ませんでした。が、幹事長や部長を経験したことから、クラブに対する思いが強いこと。第三は現在でも、那珂テニス部部員としてプレーを楽しませていただいていること、またベテランテニス愛好会や日本シニアテニス連盟などといった別のグループでも、那珂テニス部の先輩をはじめ、いわゆるテニス界の先輩たちとテニスを楽しませてもらっているので、「テニス」に感謝するとともに、その活動記録を残しておきたいと思ったからです。

このような理由により纏めたものであるため、その内容は個人のもの(公のものではない)です。このために名称は【私編】那珂テニス部の半世紀」としました。その内容は、自分の近くに残っていた写真や資料に加えて那珂工場新聞「那珂」縮刷版の中から、テニス部に関する記事を抽出して並べ替えました。また1964年に発刊された、那珂テニス部として最初で最後のクラブ誌「那珂テニス1964」を佐藤賢二さんから紹介していただきこれを全部載せました。佐々木さんからは昭和41、42年辺りの幹事ファイルを紹介してもらいました。これらは皆クラブ創設時代の状況が大変良く判る貴重な資料でした。また手元にあったビデオもDVDに変換して巻末にのせました。

2009年の暮れに、仮製本を那珂テニス部の先輩に回覧し、内容のチェックと更なる資料があればお願いしたところ、多くの情報を頂き、これ等を追加しました。これら資料の詳細は別項(資料の説明)にて説明してあります。

会社の日立会に対する考えや個人のテニスに対する考えは時代、年齢などによって変わってきますが、私がいつも思うことは「テニスをやってきて本当に良かった」と言うことです。そのひとつは、「ストレスの時代」を乗り切れたということです。もし、テニスが無かったらと思うと恐ろしくなるくらいです。第2は友達や目標などに、リタイア後も継続して、恵まれていることです。設計者はその仕事为目标であり生き甲斐であることが多く、リタイアとともにそれを失くして、地域デビューなどに苦しむ方もいます。第3は体自体(身体的)のことです。運動が健康によいことは、今では、誰でも知っていますが、楽しく時間

発刊の挨拶

を過ごして健康が維持できることは幸せです。究極は自分の膀胱癌の早期発見です。激しいテニスの運動による血尿が、これを早期に知らせてくれました。先生も良かった!と喜んでくださいました。テニス是一直も私の免疫機能を向上させる方向に働いてくれたと思い、感謝の気持ちで一杯です。

以上記しましたように、感謝の気持ちを込めて、資料を纏めました。これが、誰かの、少しでも、お役に立てば幸いです。

2010年7月7日 ひたちなか市中根 4898-4

廣瀬 博

図 6.1-3 (私編) 那珂テニス部の半世紀 発刊の挨拶(コピー)

6.2 ゴルフ

私がゴルフを始めたのは40歳代の頃だったと思います。ゴルフを始める動機はおつきあいや接待のためでした。私は、当時、理化学機械(質量分析計)の設計開発を担当していました。当時製品は未だ青年期であり、新しい応用に対応するハードの開発が主でした。多くの場合、大学の先生や、民間企業の先端研究者と連携して仕事を進めることが多く、これらの先生方と仲良くする必要がありました。これらの先生方の中には、ゴルフ大好きの方もおられたので、話を受けたときに対応できないとまずいと考えました。

一方で、社内ではゴルフが盛んで、いくつものゴルフコンペがありました。特に幹部組織のゴルフは大変盛んで、ゴルフをやらないものは部課長に昇進させない等の噂があったくらい、盛んでした。またゴルフをやらない部長が誕生すると、前部長からゴルフをやるように、申し送りされるケースもありました。

以上の状況からゴルフを始めることになりましたが、私のゴルフの技術は最後までダメでした。何年プレーしても100を切るまでになりませんでした。何年か後になって、100を切ることはありましたが、連続しませんでした。ドライバーを打った後キャディさんの「ファー」という声が今も聞こえるような気がします。ゴルフの本やビデオを手当たり次第入手して、研究しましたし、また各種クラブも何本か試しました。バブル期にはゴルフ場会員

権も2つ取得して、一人前のプレイヤーになることを目指しました。定年退職の頃になって、ようやく、ドライバー、アイアンがまっすぐに飛ぶようになりました。この時には、飛距離をなるべく出さないように、クラブはグリップリードを心がけました。すなわち、力まないで、打つ瞬間に強く握るようにしました。これにより、飛距離は逆に長くなり、ダフリも少なくなりました。その時は大発見のように思いましたが、よくよく、本などを見ると、このことは基本中の基本として説明してありました。何事も自分で体得しないとダメなことは、テニスなど他のスポーツでも同様であることはわかっていたましたが、実際体得するのは難しいことだと思いました。フェアウェイでダフリやOBが少なくなったからと言ってスコアが良くなるわけではなく、大たたきが無くなった程度で、スコアは最後までダメでした。

ところが、ゴルフにはハンディキャップがあるので、少ない回数でしたがカップを手にもすることもありました。各種コンペのカップは持ち回りでしたが、ある時期になると、取り切り戦が行われました。不思議なことに、数少ない優勝でしたが取り切り戦のときの優勝カップが何個か残っています。取り切り戦以外にも、数回(非常に多くの中の数回)優勝したことがあるので、これらを含めて以下に記します。

6.2.1 フレンドシップ

フレンドシップゴルフコンペは検査部が主催するコンペであり、歴史的にも古い大会でした。この大会に設計部門等関連製品部門も参加させていただいておりました。このコンペが45回を迎えたころ、カップを新しくするために、歴史あるカップの取りきり大会が開かれ、運よく私が獲得し、自宅に保管してあります。図6.2.1-1は初代フレンドシップカップを示します。歴史あるコンペのため多くの優勝者リボンが取り付けられていました。図6.2.1-2はこれら優勝者リボンを示します。リボンは折れ曲がったものも多かったのでアイロンで伸ばして撮影しました。残念ながらすべての大会のリボンはありませんでしたが、当時活躍した方たちの名前を確認することが出来ます。中には開催日や開催場所を記入しているものがあり、歴史的には参考になります。このような歴史ある大会のカップを獲得できたのは、本当にハンディキャップだけでなく、数々の幸運が重なった結果であると感謝しております。

6.2.2 齋藤杯

ゴルフコンペは部単位でも活発に行われていました。齋藤杯は設計部長(齋藤尚武部長)主催のコンペであり、これらの優勝者には持ち回りのカップ(後半になるとレプリカカップまたは毎回とりきりカップの場合もありました)が授与されました。部長杯は部長が交代する場合、取りきり大会が開かれます。齋藤部長が昇格されて、設計部長を離任した時に開催された大会に、まともや、幸運にも優勝することが出来ました。この時は大雨で前半のみのスコアで表彰をした結果、なぜか私が1位になりました。この時は不思議とうまくプレイできました。雨でぬかるんだバンカーから一発で脱出できたり、走りの悪いグリーンで、

計算もなく強く打ったパターが決まってしまうたりしました。この大会にはゴルフの上級者が大勢参加していましたので、これらの中で優勝できたことは本当にうれしく思いました。さらに、齋藤部長とは部の運営も一体となって進めてきたという自負があっただけに、このカップ獲得は特別のものでした。



図 6. 2. 1-1 初代フレンドシップ-カップ



(a) 第1回～10回



(b) 11回～20回



(c) 第21回～39回



(d) 第43回～

図 6. 2. 1-2 フレンドシップ優勝者リボン



図 6. 2. 2-1 齋藤杯カップ



図 6. 2. 2-2 優勝者リボン

図 6. 2. 2-1 に齋藤杯カップ、図 6. 2. 2-2 に優勝者リボンを示します。図 2. 2. 2-3 は齋藤杯参加者の集合写真を、図 2. 2. 2-4 はカップを受け取ったときの私を示します。この写真から開催時期は 1991 (H3) 年 10 月 7 日であることがわかります。またスコアを見ると、ハーフで終わっていること、私のスコアは後半しか見えませんが、ハーフで 48, HCP13, NET35 と判断されます。



図 6. 2. 2-3 齋藤杯 参加者一同



6. 2. 2-4 優勝カップ(取りきり)

6. 2. 3 齋藤(康)杯

私がゴルフを始めて間もないころ、電装設計部長は齋藤康示さん でした。その後齋藤さんは副工場長に昇格されました。副工場長になったらゴルフコンペをやらないとまずいという意見が、組合の幹部をやっている人から進言され、この大会が発足したと聞きました。私はその前の大会でブービーだったので、初めてゴルフコンペの幹事を仰せつかりました。幹事は優勝者とブービーが行う 習わし でしたが、ブービーが実質下働きをすることが暗黙の了解事項でした。当時ゴルフが盛んな時代で、ゴルフ場の予約(休日)は何か月も前でないと出来ない状態でした。私は、いろいろゴルフ場を当たった結果勝田市(現ひたちな

か市)から南に大分離れた、ダイヤグリーンが予約できたので、ここで幹事としてコンペを開催しました。このときの私のゴルフは、始めて間もない割には調子が良くて、ハンディも多かったのが優勝して、支配人賞を頂きました。(図 6.2.3-1)この大会では今でも鮮明に覚えていることがあります。それはゴルフ用語で「握り」に関することです。当時私と同じ職場で同じ時期にゴルフを始めた3人(私を含めて)で「握り」を行いました。その内容は縦横スクラッチ、リタイア3倍という厳しい内容でした。ところが仲間の一人がスタートして間もないホールで足を捻挫してしまい、タクシーで(私の車に同乗していった上に私が幹事だったため)勝田に帰り、病院で治療を受ける結果となりました。友人の大変な事態なので「握り」は無しにしようと思いましたが、リタイア3倍と強く提案したのは本人であったことから、後日清算をしました。私はこの日優勝をしましたが、友人は少ししかプレイしないのにプレイ費、タクシー代、治療費、「握り」と多額出費を余儀なくされたので、うれしいという気持ちにはなれませんでした。しかしながら、この握りは数十年後に取り返されてしまいます。このいきさつは7章に記します。



図 6.2.3-1 斎藤副工場長ゴルフコンペ優勝

6.2.4 (ナイ)杯

第5回(ナイ)杯が私のところにあります。(ナイ)というのは当時日立製作所では課長以上になるとカタカナの略称が付けられました。これは書類などを書くとき等の効率化を考慮したものと思います。課長(主任技師)はカタカナ3文字、部長2文字、事業所長クラス以上は1文字と決められていました。同じ文字になる場合は先任の方が優先で後任の方は次の文字を用いると決められていました。(ナイ)というのは中泉泰部長のことで、ちょうど(ナカ)という先任の部長がいたため(ナイ)となっていました。このころの部長杯は持ち回

りカップではなく、毎回取りきりの立派なカップが用意されていました。



図 6. 2. 4-1 第 5 回(ナイ)杯コンペ 優勝カップ 平成 17 年 10 月 22 日

6. 2. 5 五浦庭園

バブル期には各所に新しいゴルフ場の開設があり、開設前の会員権は安く手に入り、将来は何倍もの値段で売却することも夢ではない。こんな宣伝に載せられて、私も 2 つのゴルフクラブの会員権を取得しました。そのうちの 하나가五浦庭園カントリークラブでした。開設後、このクラブの月例会に何回か参加しましたが、1 回だけ B クラスで優勝しました。図 6. 2. 5-1 にこの時のカップを示します。



図 6. 2. 5-1 五浦庭園月例会 B クラス優勝 2006 年 1 月 8 日

会員権を取得した他のゴルフ場(茨城クラシック)も開設し何回か月例会やプライベートコンペなどに参加しましたが、どちらのゴルフ場も、バブル崩壊後は経営不振で倒産処理となりました。これにより会員権は紙くず同然となりましたが、どのような資格か忘れましたが引き続きプレーはできました。定年退職からしばらくして、ゴルフをやらなくなって、年会費だけ納める状態が長く続いたため、どちらのゴルフ場も資格を返上しました。これらは、私のバブル期の夢の一つでした。



図 6. 2. 5-2 五浦庭園 CC 会員証



図 6. 2. 5-3 茨城クラシック CC 会員証

以上那珂工場時代のゴルフについて、優勝してカップを頂いたものについて記しましたが、この裏には非常に多くのコンペがあり、これらに参加しました。例えば NGA(那珂工場部課長ゴルフコンペ)はほとんど義務的に参加しました。このコンペでは優勝の記憶はありませんが、組合せなどは政治的に行われることもあり、日常業務で言えないようなことを待ち時間やパーティー等の間隙に行ったこともあります。日立製作所大甕ゴルフクラブも会員になって、何回も参加しました。ここはハーフのコースですが、距離が長く、松林に囲まれた難しいコースでした。これ以外に部長杯、工場長(本部長)杯、同期会、定年退職送迎コンペ等数限りなくありました。これらの大会の内、私ではありませんが、ホールインワンを達成した方の記念品が 2 件私の元にありましたので、これを以下に示します。



図 6. 2. 5-4 ホールインワン記念
根本昌弘 馬頭後楽園 14 番 H



図 6. 2. 5-5 ホールインワン記念テレカ
大高正 大甕 GC 3 番 H

ゴルフを始めた初期のころは、コンペに参加した後、スコアや参加費用などをエクセルに纏めました。何回やっても上達しないので、記録を辞めてしまいました。しかしながら、ゴルフは私の人生で最もお金を使ったスポーツであることは確かです。

6.2.6 その他のスポーツ

那珂工場時代のテニス、ゴルフ以外のスポーツで、記憶にあるのは、運動会です。初期のころの運動会は3工場(那珂、水戸、勝田)対抗で行われました。この場合運動会はほとんど日立製作所としての見世物(宣伝)だったように思います。1工場1チームですから、選手になることはほとんどできませんでした。大応援団の雛壇メンバーに入った時は夢のようでした。その後、各工場ごとの開催になり、この場合は集団対抗になったため、参加できる割合も増え、家族とともに楽しむ大会に変化していきました。適当な年齢層になると、大会の企画や運営も行いました。

運動会だけでなく日立会という組織でバレーボール、パンポン、ソフトボールその他多くの課対抗競技(課対抗優勝チームは全社大会に出場できる)が行われました。図6.2.6-1は課対抗ソフトボール大会のときの私のバッティングフォームです。図6.2.6-2はバトミントンを楽しんでいるときの写真です。この時代、冬場に使用できるテニスコート(ハードコート)は少なく、冬場の休日にハードコートを予約するために大変苦勞していました。コートが予約できないときは、スキーに出かけたり、体育館でバトミントンなどを楽しみました。



図 6.2.6-1 課対抗ソフトボール大会



図 6.2.6-2 体育館でバトミントン

私のところに **MASS** スポーツ大会 **MVP** というカップがあります。私たちは、当時、電子装置設計部という組織の中のマスグループに所属していました。マスというのは質量分析計(Mass Spectrometer)のことで、英語の **Mass** からマスグループと呼ばれていました。このグループで、スポーツ大会を実施した時、当時グループ取り纏めをしていた高橋貞夫主任技師(課長相当)が私費で **MVP** 杯を用意してくれました。競技種目はバレーボール、卓球などを行いましたが、運よく、幹事が私を **MVP** に選んでくれました。



図 6. 2. 6-3 MASS スポーツ大会 MVP



図 6. 2. 6-4 MASS スポーツ大会 卓球

7. 定年退職後

7.1 テニス

7.1.1 日本ベテランテニス愛好会 (JVTS)

定年退職後は現役時代より増してテニス中心の生活になりました。テニスの技術は現役時代よりもずっと上手くなったように思います。日立製作所那珂工場には部課長以上の退職者で構成する、那珂社友会、という組織があり、年に一回例会(職場見学、会社近況報告、懇親会)が開かれます。この例会に参加した時、那珂テニス部の先輩(佐藤賢二さん)から、今度中島コートに来てみないかと誘われて、そこに顔を出しました。そこは「日本ベテランテニス愛好会:JVTS」という由緒ある組織でした。コートのオーナーである中島正周さん(故人)は軍人でしたが、第二次世界大戦後インドネシアの独立運動の指導をされた方で、インドネシアの英雄でした。独立後もインドネシアで近代化(ビル建設等)に貢献しました。毎年、独立記念日には招待されるし、インドネシア(大統領)と日本政府(首相)の橋渡し役まで務める大物でした。また、JVTSは何回もインドネシアテニスツアーを行っていますが、この時は国賓扱いで迎えられたそうです。中島さんはひたちなか市テニス協会の会長も務められました。このあたりの詳細は「日本ベテランテニス愛好会報:創立 20 周年特集号」(図 7.1.1-1)に纏めました。



図 7.1.1-1 日本ベテランテニス愛好会報 創立 20 周年記念特集号(表紙)

JVTS では高齢者が楽しくテニスを楽しむ仕組みがたくさんありました。コートハウスでの食事には女子部員が季節の手料理を持って来たり、手作りのケーキをほとんど毎回差し入れしてくれる方もいます。コート脇の山桜が咲くと花見、その他季節によって、バーベキュー、芋煮会、焼き芋、流しそうめんなどの行事が次々に行われました。これらの状況も日本ベテランテニス愛好会報 創立 20 周年記念特集号に記してあります。私が JVTS 会員になって 5 年後ぐらいに、創立 20 周年を迎えました。私は未だ、このクラブでは新人でしたが、文章を書いたり、編集したりすることが好きであるため、この特集号は私が編集担当しました。特集号は当時の会員には配布しましたが、すべてデジタル化して保管してありますので、要望があればいつでも差し上げることができます。

7.1.2 日本シニアテニス連盟 (JSTA) - 茨城県シニアテニス連盟 (ISTA)

私は会社を定年退職 (60 歳) したあと 5 年間、技術契約により会社の仕事をつづけました。

この間(現在でも)休日は那珂工場テニス部の方と一緒にコートで練習させていただいています。この場に参加していた直井啓吾さん(茨城県ダブルス優勝経験者、元茨城県テニス協会会長)から、金曜会に参加しないかと誘われました。直井さんは那珂工場OBではなく、佐和工場OBですが、自宅が、那珂工場テニスコートの直ぐ近くにあるため、良くここにきていました。金曜会というのは、茨城県の硬式テニスの草創期に県レベルで活躍(優勝)した人の何人かが集まって行う練習会のことです。従来金曜日は日立で練習会を行っていましたが、ひたちなか市から日立市は遠いこと、ひたちなか地域の参加者の方が日立地域の参加者より多いことから、金曜日はひたちなか市で行うことに変更していました。変更当初参加人数が少なかったこともあって、私(過去のテニスレベルは低い)にも声がかかったわけです。

金曜会の練習に参加しているときに佐藤暢芳さんから「廣瀬はシニアテニス連盟に入っているか」と聞かれました。佐藤さんは茨城県シングルス選手権で2回優勝経験のあるテニスの達人で、茨城県シニアテニス連盟(ISTA)の会長を務めていました。会長から、直々に、声をかけられたので即入会手続きをしました。入会して間もなく、佐藤さんから「シニアの大会のとき受付(Excel 操作)を手伝ってくれないか」と要請がありました。私はPC操作は好きだったので、いいですよと答えました。佐藤さんは、お手伝いしてもらうために、副事務局長としてISTAの理事になってくれと言われ、これも二つ返事で承しました。ISTAでは年末に理事総会を開き、次年度の計画、予算、役員改選などを行います。その後の理事会で佐伯生穂(事務局長)から突然、私は体調が悪く、事務局長の仕事が難しいので、廣瀬に代わってほしいと提案がありました。通常役員の改選は、会長があらかじめ皆と相談し合意のうえ、理事会で承認というかたちをとります。今回は全く突然のことでしたが、会長もなにも言わないので、事情が健康上のことだったので、受けることにしました。この時から、私のテニス人生は大きく変わりました。すなわちISTAでは、自分のプレーよりも組織のことを優先して考えざるを得なくなりました。

ISTAの活動内容はホームページ「<http://i-sta.net>」に表示してあります(2016年現在)。

7.1.3 シニア連(東海)

ISTA 県北の会員の有志が、毎週(火曜日午後)に東海村村営コートで練習会を行っています。この会も、当初ISTAの事務局長である佐伯生穂さんが代表で実施していましたが、佐伯さんが、事務局長交代の後、埼玉県に移住してしまったため、私が会を引き継いだ形になっています。

7.1.4 那珂工場テニス部OB会(NTO)

日立製作所那珂工場は現在日立ハイテク(KK)那珂事業所となっています。東日本大震災の後、ハードコート2面が整備されたのを機会に、那珂テニス部OB会を結成しました。結成

の声掛けは吉田朋正さん(吉田さんも茨城県ダブルス選手権で久本さんと組んで優勝しています)です。会長吉田朋正、副会長佐藤賢二、幹事長(事務局)はここでも私です。会員の資格はかつて那珂工場テニス部に在籍したことがあり、退職しているものとなりました。現在、(火)(木)(金)の午後例会を開いています。私はこの会を開始してから、金曜会には出ないで、金曜日はこちらで練習しています。



図 7.1.4-1 那珂テニス部 OB 会 (NTO) 発会

那珂工場は多賀工場から分離独立しました(1961)。この時代に多賀工場と一緒にプレーしていた仲間が、佐和工場、那珂工場、勝田工場、栃木工場などに分散していました。これらの人達が集まって懇親大会が実施されました。取りまとめ役は茨城県側は直井啓吾さん、栃木県側は井村孝一さんでした。コート確保の点でほとんど栃木県にて実施しました。図 7.1.4-2 は第 1 回日立栃木-茨城 OB 懇親大会の参加者と結果を示します。大会は 4 回ほど行いましたが、皆が高齢となって、現在は中断しています。



試合	対戦相手	結果
1	日立製作 対 茨城県	日立製作 勝利
2	日立製作 対 栃木県	日立製作 勝利
3	茨城県 対 栃木県	茨城県 勝利
4	日立製作 対 茨城県	日立製作 勝利
5	日立製作 対 栃木県	日立製作 勝利
6	茨城県 対 栃木県	茨城県 勝利
7	日立製作 対 茨城県	日立製作 勝利
8	日立製作 対 栃木県	日立製作 勝利
9	茨城県 対 栃木県	茨城県 勝利
10	日立製作 対 茨城県	日立製作 勝利
11	日立製作 対 栃木県	日立製作 勝利
12	茨城県 対 栃木県	茨城県 勝利

図 7.1.4-2 第1回日立製作茨城県-栃木県交流戦 参加者と結果

7.1.5 東クラブ

ベテランテニス愛好会 (JVTS) と同じくらい古くから常陸太田市に東クラブというクラブがありました。何人かのメンバーは JVTS のメンバーでもあります。両クラブは対抗戦とか懇親会(バーベキュー)などの交流会も実施していました。あるとき、両クラブに参加していた佐々木正光さん(JSTA, JVTS, NTO メンバー、かつて佐藤邦洋さんと茨城県ダブルス選手権優勝経験あり)から小野先生(現役時代教職であったことからこのように呼んでいる)が廣瀬にも(東クラブに)参加してほしいとの意向を聞きました。東クラブの会員を増やし、技術レベルも向上させたい意向があったものと思います。私は土曜日には日立ハイテクコートでの練習に参加していましたが、小野先生(大先輩)からの声掛けだったので、午後は東クラブに参加することとしました。小野先生は、また、私の写真技術にも目をつけて、あるとき、私(小野先生)のテニスフォームを撮ってほしい、それを私の遺影にしたいとの申し入れがありました。奥様を亡くされた後だったので、そのような心境になったのだと思います。後日撮影のためにコートを予約し、連写でフォアハンド、バックハンド、サーブのフォームを撮影し、ベストショットを額に入れて届けてあります。但し現在(2016年)小野先生は米寿を迎え、腰痛に苦しみながらも、コートにでています(木曜日)。

7.2 野球

野球は 20 歳台以後やったことはありませんでしたが、還暦を過ぎた後、中学時代の野球部と現役の野球部と懇親大会(同窓会を兼ねる)をやるので集合せよとの連絡が入りました。私は、スパイクとグローブを新調して、母校富士宮市立第四中学校に行きました。日ごろ運動しているので、年寄用に設定した特別ルールを試合を難なくこなしました。ヒットも複数本打ちました。ところが家に帰ると、肩が痛くてラケットを振るのも大変でした。やはり、すこし張り切り過ぎたと反省しております。この時の模様は地域の新聞のいくつかにありますので、そのうちの一つ岳陽新聞の記事を、図 7.2-2 として示します。



図 7.2-1 老若交流野球大会 富士宮四中 2 列目左端が私(赤帽)



図 7.2-2 老若交流野球試合 岳陽新聞

7.3 ゴルフ

定年退職後しばらくしてゴルフは辞めました。テニスと両立するほど器用ではないことに加え、五浦庭園の月例会に参加した時、非常に寒い上に、昼食後は暴風雨になってしまいました。大会は中止しないが、やめて帰るのは自由ですと言われて、帰ったことがあります。これが最後の例会になりました。その後コンペも練習場へも行かなくなってしまいました。

これとは別に定年退職後に2回記憶に残るプライベートコンペを行いました。

2005年10月愛媛県松山市内のサンセットヒルズゴルフクラブで高橋貞夫、中泉泰、三村忠男と小生の4人でゴルフを行いました。高橋さんは日立を辞めて、奥様の実家で経営していた長曽我部糖化工業(株)の経営を引き受けて(社長)活躍していました。高橋様の提案(ほとんど招待)で四国旅行を行い、このうちの1日を奥方達と別行動でゴルフを行いました。結果は図の通りで、高橋さんが唯一100を切り86というスコアでした。高橋さんは6.2.3項齋藤(康)杯のところで記した(リタイアした)人です。高橋さんとは、日立を退職するまでに、何回も握りましたが、あまりとられた記憶はありません。今回見事にリベンジされたわけです。とはいっても、このゴルフは、プレー費、飲食費を含めてすべて高橋社長に支払っていただきました。



図 7.3-1 久しぶりのゴルフ再会(松山市サンセットヒルズ GC 右はスコア)

次のゴルフは2009年10月です。前回松山では高橋さんにゴルフだけではなく宿泊(会食)まで接待していただいたので、今回このお返しも含めて、茨城の旅行を計画しました。前回と同様に、ご婦人同伴ですが、男がゴルフのとき、ご婦人は笠間焼の見学でした。さてゴルフは茨城ロイヤルカントリークラブで行い、図の右に示す通り。高橋さんはさらに上手くなっていました。前回に比べて三村さんのスコアは良くなっていますが、私は106で全く進歩がありません。しかしながら、前回コンペからクラブをほとんど握っていないこ

とを考えると。106 キープは立派であると自分ではほめています。



茨城ロイヤルゴルフ倶楽部 (C.R.C.)
2009年10月27日
Total Score: 948.000000
Hdcap: 46.000000

順位	氏名	Score	Per	二輪	高橋	沖島	三好	Key	Key2
1	106	80	80	■	△	□	△	3	14
2	104	80	80	△	—	□	—	3	14
3	107	81	81	□	△	—	△	10	10
4	105	80	80	□	△	■	□	11	10
5	101	79	79	□	—	□	□	7	10
6	108	81	81	□	△	□	△	3	10
7	103	80	80	□	—	■	—	3	10
8	102	80	80	□	○	△	△	10	10
9	109	80	80	□	△	□	□	3	10
10	106	80	80	5P	9P	1P	4P		100
11	100	80	80	□	△	■	—	3	10
12	104	80	80	□	□	△	△	10	10
13	103	80	80	—	△	△	△	10	10
14	102	80	80	■	—	△	□	10	10
15	106	80	80	□	—	—	△	3	10
16	108	80	80	□	—	■	—	3	10
17	101	80	80	□	△	■	□	10	10
18	102	80	80	—	△	△	—	3	10
19	103	80	80	△	—	□	—	10	10
20	107	80	80	5P	9P	1P	4P		100
Total	1711	1344	78	20.6	32	19	32		1000
Key				1P	1P	1P	1P		
Key2				2P	2P	2P	2P		

図 7.3-2 2009年10月茨城ロイヤル(写真中泉) 右は結果 (Hdcp)は per になる値

2009年のこのコンペ以後私はゴルフクラブを一度も握っていません。テニスの仕事が公私とも多忙でゴルフに対する意欲がわいてきません。